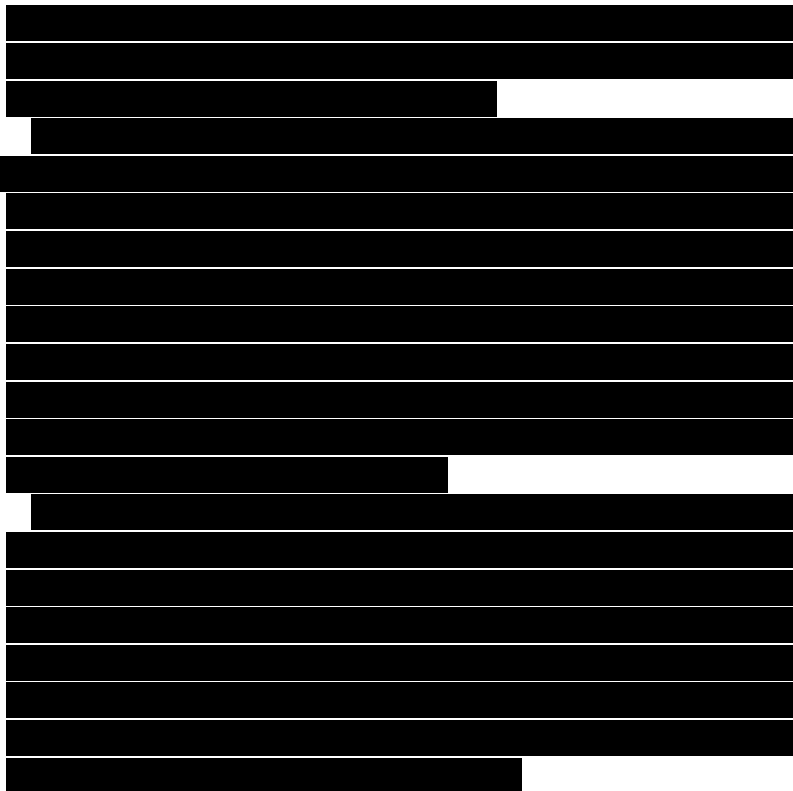


2019年度修士論文要旨

その他のタイトル	Vorstellung der Magisterarbeit 2019
著者	永沼 琴子
雑誌名	独逸文學
巻	65
ページ	186-190
発行年	2021-03-20
URL	http://doi.org/10.32286/00023423



2. 永沼琴子

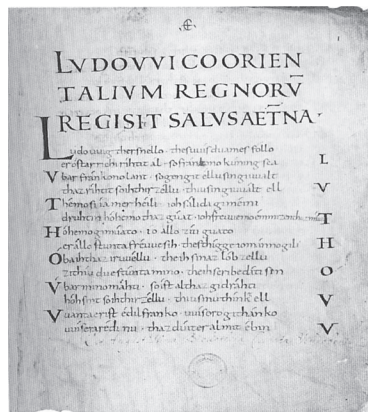
ルター聖書における句読法の通時的考察

我々が目にするドイツ語や英語などの言語には語と語の間にスペースが見られるが、これはアルファベットの不連続体 (scriptio discontinua) の体系に分類される。そしてこの体系に句読点は規則的に現れる。また、スペースを用いずに語を書き連ねる連続体 (scriptio continua) の体系も西暦 500 年頃まで見られた。こちらの体系にはたいてい句読点がない。[NACHAUSCHWITZEINGEDICHTZUSCHREIBENISTBARBARIS

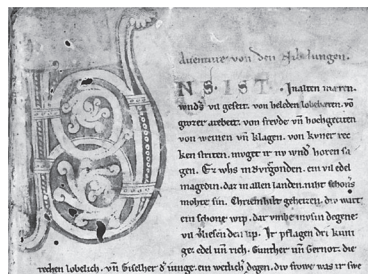
CH」という連続体のテキストを見てみると、どの箇所です語を区切ればよいのか一見判断しづらい。これを不連続体の文章で書くと、「Nach Auschwitz ein Gedicht zu schreiben, ist barbarisch.」となり、先程と比べると読むのも書くのも易しい文章となる。スペースはドイツ語で Leerzeichen と言う。「空の記号」という言葉が示す通り、スペースも句読点の一種とみなすことができる。スペースと言う句読点があるかないかで、瞬時の情報把握や文の解釈にまで影響が出てくる。そのようなことから、句読点は文に欠かせない重要な要素と言える。

ドイツ語史における句読点について見ていこう。スペースを用いた分かち書きの文化が生まれたのは西暦 500 年頃とされているため、西暦 750 年頃から登場するドイツ語文献には最初から分かち書きがなされていたと考えられる。

右の資料は、古高ドイツ語（750-1050 年）で記されたオトフリートの福音書（Otfrids Evangelienbuch、9 世紀）の 1 枚目の表（おもて）（1 recto）である。文中には中黒、文末には語の右上に点が用いられ、またコロンも見られる。また、同じ古高ドイツ語の資料にメルゼブルクの呪文（Merseburger Zaubersprüche、原本：8 世紀、写本：10 世紀）が存在するが、用いられている句読点は中黒だけである。



中高ドイツ語（1050-1350 年）の資料としては、右の図版のニーベルンゲンの歌（Das Nibelungenlied、13 世紀前半）が挙げられる。これは叙事詩の冒頭部分である。最初の大い U の文字から始まり、Uns と ist の後ろにそれぞれ中黒が



ある。そして in alten mæren と続いて、一行目の最後、語の右下に点が見られる。ニーベルンゲンの歌は韻文（1節4行の詩節）で構成されており、この語の右下の点は韻の箇所を示しているものと考えられる。

次に紹介するのは初期新高ドイツ語（1350-1650年）のテキストである。右図は宗教改革者のマルティン・ルター（Martin Luther, 1483-1546）が翻訳した、1545年版ルター聖書のマルコによる福音書冒頭部分（Lutherbibel, 1545年）である。ルター聖書は分かち書きがなされているほか、句読点としてピリオドと疑問符、そしてヴィルゲルと呼ばれる斜線（/）が使われ

ている。ヴィルゲルはこれまで見てきたテキストにはなかったものであり、逆にルター聖書には中黒が見られない。また、オイレンシュピーゲル（Eulenspiegel, 16世紀）とファウスト博士の物語（Historia von D. Johann Fausten, 16世紀）に関しても句読点は同様のものが使われている。

以上、句読点に着目しながら、古高ドイツ語から初期新高ドイツ語までのテキストを数点見てきた。9世紀から15世紀までの主な句読点は中黒であったことが窺え、16世紀以降にヴィルゲルと文末を表すピリオドが登場したと言えるだろう。そしてヴィルゲルに代わってコンマが普及するのは17世紀末になる。

ルター聖書に登場する句読点に関して、もう少し踏み込んで見ていきたい。ヴィルゲルの機能については『ドイツ言語学辞典』（紀伊国屋）に記述がある。1097ページによれば、「16世紀になり、印刷術の発明や宗教改革などによって多量の文書や印刷物が出回るようになると、印刷業者たちは印刷物が朗読された場合に意味が通るように、<息継ぎ>の目安として斜線を用いた。斜線は文中の文法的なまとまりをなす語群



(Wortgruppe) や文肢 (Satzglied) の境目に置かれた。」説教や朗読の際の息継ぎの目安に打たれたのがヴィルゲルであり、「統語的」(文法の枠組みで行われる区切り方)ではなく、「修辭的」(個人の主観に依存する区切り方)な句読点であると言える。

実際にヴィルゲルやピリオドがルター聖書でどのように用いられていたのか見ていこう。分析したのは、1522年版、1534年版、1545年版ルター聖書のマルコ福音書である。

まずマルコ福音書の1章から16章までにおける句読点の数を調べた。例として1章の表を挙げる。

1章	1522年版	1534年版	1545年版
Virgel	130	129	123
Punkt	15	32	40
疑問符 (?)	3	3	3
段落	14	14	13

マルコによる福音書全体の句読点の数を調べたところ、1522年から1545年という短い期間において、ヴィルゲルは年を経るにつれて数が減少する一方、ピリオドは増加していることがわかった。

次に、1522年版から1545年版にかけて句読点がどのように変化していったか、その通時的变化を調べた。例えば1522年版でヴィルゲルが使われていた箇所ではその後の聖書ではどのような句読点が用いられていたかなどである。この三者の比較において、どの章でも最も多かったのは、1522年版から1545年版までヴィルゲルが変化しなかった例である。これがマルコ福音書全体で1807例あった。次に多かったのは、1522年版でヴィルゲルであった箇所が、1534年版と1545年版においてピリオドに変化している例(285例)であった。この二番目の例を見て考えられるのは、現代的な意味で文の終わりにピリオドを置くようになったのではないかということである。そこで次はピリオドに着目する。

三つの聖書の中で最も数の少なかった1522年版のピリオドを使って、その機能を分析する。ルター聖書のピリオドは段落の最後に置かれてい

ることが多いが、必ずしも文の終わりに打たれているわけではない。文末にはヴィルゲルが来ることもあればピリオドの場合もある。ヴィルゲルは息継ぎの目安に挿入された句読点であり、現代におけるドイツ語の句読法とは掛け離れたものである。当時の句読点の使い方が現代とは異なるものであるならばピリオドに関しても同様のことが言えるのではないだろうか。

ここでは段落の最後に打たれているものではないピリオドに注目し、その1522年版のピリオドが2017年版の現代語訳ではどうなっているのかを調べた。その結果、2017年版ではピリオドの他に、「!(感嘆符)」や「?(疑問符)」、コロンが見られた。段落の最後以外に用いられた1522年版のピリオドは、ほぼ文末に置かれていると考えてよいだろう。また、同様の検証を1545年版のマルコ福音書第1章と2017年版でも行ったが、こちらも1章に関しては、ピリオドは文末に置かれていると考えられる。

ここまで句読点を見てきたが、ヴィルゲルは統語的な句読点ではなく、息継ぎ、修辭的な性格を持っていたと考えられる。ピリオドに関しては、その機能は主に大きな区切りに使われ、段落から節の最後、文末に置かれる場合が多い。本稿の考察により、1522年版から1545年版にかけてピリオドの数が大幅に増加することがわかった。それと共に、段落の最後に打たれることが多かったピリオドが、次第に段落以外の文末に置かれるようになっていった。ただし現代のように全ての文の最後に使われているわけではない。そしてそれに反比例するかのよう、節や文の終わりに置かれていたヴィルゲルがこの領域から撤退していき、機能が縮小された。